

筑波大学蹴球部における競技力向上のための取り組み —パフォーマンスチームの創設から現在まで—

小井土正亮¹⁾

Activities report to improve the competitiveness of the football club at the University of Tsukuba — From the establishment of the Performance Team to the present —

Masaaki KOIDO¹⁾

【はじめに】

筑波大学蹴球部（以下、蹴球部）は、東京高等師範学校フットボール部（1896年創設）を起源にもち、長い歴史と伝統を有している。これまでに内野台嶺（故人）、多和健雄（故人）といった日本サッカーの礎を築いてきた先達をはじめ、高田静夫（元審判：サッカー殿堂）、田嶋幸三（現日本サッカー協会会長）、風間八宏（前名古屋グランパス監督）、長谷川健太（現FC東京監督）といった現在も日本サッカー界を牽引している多くの人材を輩出している組織である。

そうした背景をもつ蹴球部において、筆者は2014年から指導者として活動している。本稿では監督として迎えた最初のシーズンの2015年に創設したパフォーマンスチーム（Performance Team：以下、PT）について、その創設の意図、目的、活動内容等を報告するこ

とにより、これからのより良い大学スポーツのありかたについて考えていくための一資料を提供することを狙いとした。

【創設の経緯】

2015年当時、蹴球部は前シーズンの成績により、関東大学サッカーリーグ戦において、戦後初となる2部リーグへの降格が決まっていた。新たなシーズンを迎えるにあたり、かつて経験したことがない危機的な状況であることを鑑みて、筆者は何か新しい取り組みにチャレンジする必要性を強く認識していた。前シーズン、コーチとしてチームにかかわる中で、チームがより強くなり、個人が成長するためには、トレーニングや試合といった実際にプレーをするピッチの中だけでなく、ピッチの外でもっとできることがあるはずだと感じていた。そこで、まず前シーズンまで主に筆者が一人で行っていたゲーム分析や映像編集の作業につい

1) 筑波大学体育系

Faculty of Health and Sports Science, University of Tsukuba

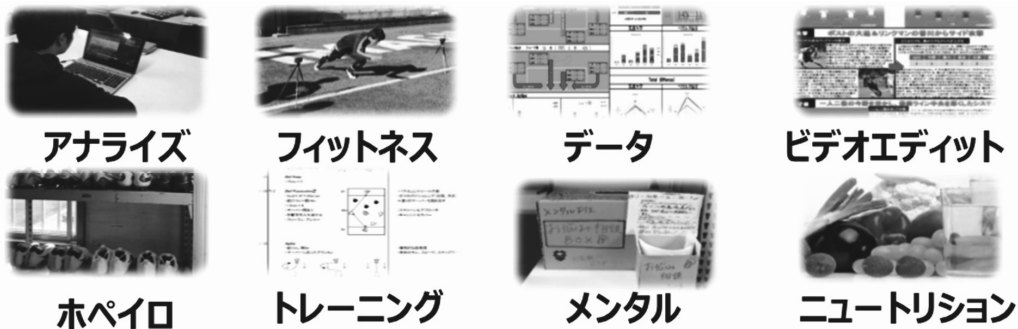


図1 パフォーマンスチーム

て、学生を巻き込んで行うことを企図し、賛同者を募ったところ、想定していた以上に希望する学生が多かった。そこで、系統的に機能させていくほうがより合理的であると考えた筆者は、対戦相手の分析（スカウティング）を担当するアナライズ班、自チームの分析を主にスタッツを出しながら行うデータ班、Jリーグ、海外サッカーなどのプレーを収集するビデオ班と分類し、総称してパフォーマンス局（現在PT）として、組織的な活動を開始した。当時の資料を読み返すと、「パフォーマンス向上のためにやれることをすべてやる」という決意のもと、「ピッチ内外問わず、サッカーと真剣に向き合っていこう」と学生らに呼びかけるミーティングを行っていた。PTを立ち上げた当初は15名弱での活動であったが、その年の最後には70名弱が参加していた。それは「もっとトレーニングの勉強をしたい」「メンタル面のサポートも必要」「食事の充実こそ重要」といった、学生たちから挙がってきた声を反映させているうちに、8つの部門（前記3班に加え、トレーニング班、メンタル班、フィットネス班、ニュートリション班、ホペイロ（用具係の意）班）が形成され（図1）、PTの活動が多方面に広がっていったことが大きな要因であった。2015年は立ち上げ期でもあり、まずは組織の体制化、役割の明確化などに追われたが、翌2016年からは、PTの活動目的を「個人、チームのパフォーマンス向上に寄与する」「班員の

知識、理解を促進し、スキルを向上させる」の2つに定め、各班のリーダーのもと、活動方針、計画を立て、それぞれの班で創意工夫をしながら活動を行っている。

【組織構成の背景】

PTが上記のように派生的に拡がりをもせていったのも、蹴球部員の構成が影響していると考えられる。例年、蹴球部には160名程度（ひと学年40名程度）が在籍し、5つのカテゴリーにチームを分け、各チームがそれぞれの公式戦に臨んでいる（図2）。つまり、大人数の組織であるがゆえに、トップチームで公式戦に出場できるのは全体の一割にも満たないことになる。そうした環境において、PTの活動を通じて「やりがいはずごくあります。（自分は）トップチームのメンバーになったことはないですが、トップチームと関われるのが大きな経験になっています。決して僕らがメインではなくて脇役ですけど、選手が相手の情報を知ってリラックスして試合に臨めるかは僕たちにかかっていると思います」（図3、アナライズ班員、TV番組取材時コメント）と語る部員ができたように、プレー以外でトップチームをサポートすることに喜びを見いだす部員がみられたのは筆者としてもうれしい誤算であった。異なる視点から考えれば、それまでにトップチームに貢献したくてもする「場」がなかったともいえ、PTはそのきっかけづくりに貢献

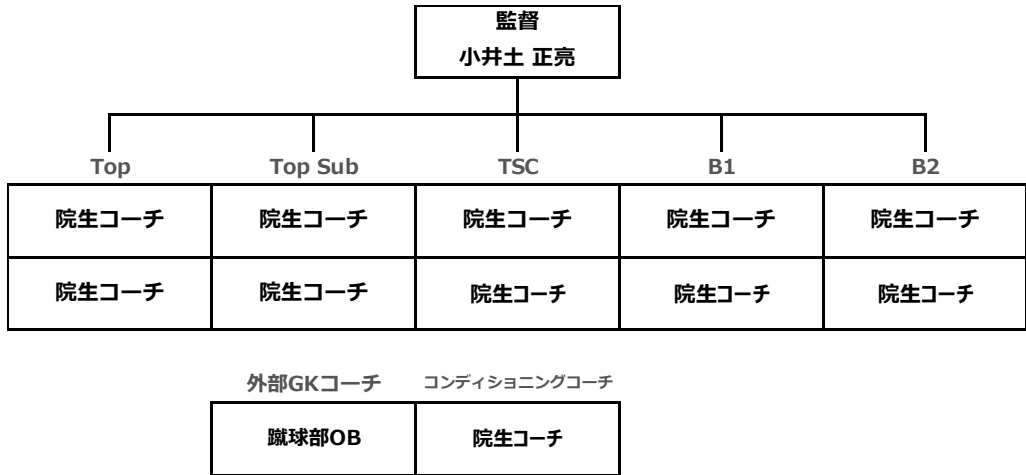


図2 チーム体制



図3 アナライズ班員コメント

したといえるだろう。また、部員の所属学群、学類の内訳については、体育専門学群所属の学生が6～7割程度である。つまり、体育・スポーツ以外を学ぶ学生が3～4割程度所属することになる。そういった学生それぞれの専門領域を活かしながら、サッカーというキーワードのもと、学際的に活動が行えることはお互いにとって大きな刺激となっているようである。これこそ総合大学における部活動の良さであると強く感じている。

【活動内容】

ここですべての班の活動を報告することは難しいため、アナライズ班ならびにメンタル班を取り上げ、その取り組みについて紹介してい

たい。

アナライズ班は、前記した通り、トップチームが次に対戦するチームの分析を役割としている。班員には学群生だけでなく、院生スタッフも多く参加しているのが特徴である。主な活動の流れとしては、次に対戦するチームに関する情報をできるだけ集め、レポート(図4)と特徴をまとめた映像を編集し、監督、コーチングスタッフと打ち合わせをする。そこで、監督の意図、選手らへどう伝わるかなどを検討した結果、適宜修正等を行い、試合の2日前に選手に対して対策ミーティングを行う。そこでのプレゼンテーションはアナライズ班の当該試合の担当学生が行っている。つまり、トップチームの試合には出られない部員が、トップチームの部員に対して次の試合におけるポイントを伝えることになり、担当学生にとっては非常に緊張感が高い場となっているようである。また、この班に院生スタッフが多く参加している背景としては、彼らの中には、大学院修了後にJリーグチームのアナリストになることを志している者が多く、班の活動における自身の分析内容、プレゼンテーションについて、Jリーグチームでのアナリストとしての経験もある筆者からフィードバックを受けられる場となっているこ

第〇〇回全日本大学サッカー選手権大会 準々決勝 vs△△大学 Scouting Report

△△大学 予選スターティングメンバー

Date: 20×××××× 13:00 kickoff
Match: インカレ 準々決勝
Vs. △△大学
Stadium: 味の素公園総合競技場



メンバーの可能性がある選手

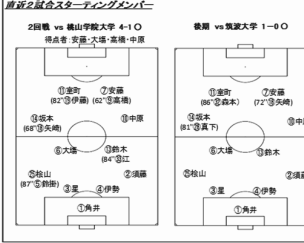
①八木 大	GK	3年	東洋大	181/73	右	試合(0)
②長 隆生	DF	3年	駒澤大学	182/73	右	試合(4)
③清水 真	DF	1年	三浦学院	174/65	右	試合(1)
④真下 雅樹	DF	2年	天栄中央	176/70	右	試合(2)
⑤伊勢 大	MF	4年	山梨学院	170/81	右	試合(0)
⑥高橋 幸希	MF	2年	長崎経済大	173/69	右	試合(0)
⑦前田 洋	MF	4年	清水桜が丘	178/75	右	試合(3)
⑧堀本 拓也	MF	4年	広島商大	177/67	右	試合(2)
⑨松本 繁夫	MF	1年	長崎経済大	170/64	右	試合(0)
⑩江崎 巧朗	MF	1年	ルール学院	176/63	右	試合(0)
⑪高橋 雅隆	FW	3年	山梨大	178/78	右	試合(8)
⑫矢野 一輝	FW	2年	駒澤大学	178/72	右	11試合(0)
⑬佐々木 ヒロ	FW	2年	天栄中央	186/82	右	1試合(0)

後期出場時間上位11人

GK	①角井 実太郎	11試合(11)	990分
DF	③尾 幸一ファン	11試合(11)	990分
DF	④伊勢 野	11試合(11)	990分
MF	⑤高橋 幸	11試合(11)	975分
FW	⑩高橋 幸希	10試合(10)	854分
DF	⑥松山 悠也	8試合(8)	810分
MF	⑧松本 繁夫	8試合(8)	789分
FW	⑨高橋 雅隆	8試合(8)	688分
MF	⑪松本 和輝	11試合(7)	615分
MF	⑫高橋 幸希	6試合(6)	532分
DF	⑬高橋 拓	6試合(6)	529分

2015シーズン成績

順位	対戦相手	得点	失点
第1位	vs法政大	1-1	△
第2位	vs法政大	2-5	○
第3位	vs法政大	1-1	△
第4位	vs法政大	2-1	○
第5位	vs法政大	1-1	△
第6位	vs法政大	3-2	○
第7位	vs法政大	0-0	△
第8位	vs法政大	1-0	○
第9位	vs法政大	3-2	○
第10位	vs法政大	0-1	○
第11位	vs法政大	2-1	○
第12位	vs法政大	1-0	○



チームデータ

得点失点時間

時間	得点	失点
09-15分	1(0)	4(3)
15分-30分	5(0)	4(0)
30分-45分	6(4)	4(0)
45分-60分	4(1)	4(2)
60分-75分	8(0)	3(1)
75分-90分	8(4)	5(2)

Open play

Attack

Build up

- 縦陣突破へ
- ロングボール 主体
- フロントメンピブルに転換へ
- DFのリスクマネジメント
- 11選手がターゲット
- 両サイド100%と14選手のみしか

Set Def

- FWが両サイド
- マンツーマン突破を容れず(マークの受け渡しは少ない)
- ローテーションや列目からのとび出しなどが有効

Att. ⇒ Def.

- 守り難い
- SH, ボンチ, FWがプレス
- 背後のスペース

Defence

Excess

- FWの前線からのプレッシング, 自由にプレーさせない
- 縦陣突破の時に人数でプレス
- 両サイドが守りに専念

Set Def

4-4-2の陣形

- DFが両サイド
- マンツーマン突破を容れず(マークの受け渡しは少ない)
- ローテーションや列目からのとび出しなどが有効

FK Attack

守り手

- #10 中野 左
- #7 矢野 右

ターゲット

- #3 尾 184cm
- #4 伊勢 184cm
- #11 室町 180cm

Set play

CK Attack

守り手

- #10 中野 左
- #7 矢野 右
- 左右ともヒールインサイド

ターゲット

- #3 尾 184cm
- #4 伊勢 184cm
- #11 室町 180cm(CK前からニア)

Defence

CK

- 1st-10st
- マンツーマン

ニアに受けとるスペースに飛び込む

EX

- マンツーマン

図4 分析レポート

とがある。実際2019年度に修了した学生のうち4名がアナリストとしてJリーグチームと契約し、さらに日本サッカー協会のテクニカルハウス(分析部門)に職を得た院生もいるように着実にその成果も出ているといえるだろう。

次にメンタル班についてである。メンタル班は、体育心理学研究室所属の学生を中心に、部員へのメンタル講習会や目標設定シートの作成とフィードバック、またはチームビルディングの取り組みなどを行っている。学群生だけでは実施が難しい講習会形式のプログラムについては、同研究室教員ならびに蹴球部OBの大学院生のサポートを得ながら実施している。その年ごとに取り組むテーマ(2017年:メンタル相談室, 2018年:チームビルディング, 2019年:目標設定など)を設定し、試行錯誤しつつ、より良いものにしていくために改善を重ねてい

る。特に2018年に行われたチームビルディングの取り組みについては、主に担当した学生の所属チームに対してプログラムを実施し、その前後に心理尺度を用いて測定し、その効果を検証することでよりそのプログラムの有効性を検証することができた。また、その内容が担当学生の卒業論文(内田, 2018)としてまとめられた。

【活動の成果】

本活動をしていく中で得られた成果としては主に3つ挙げられる。

1つ目は、パフォーマンスの向上である。本活動が始まって2年目の2016シーズンには第97回天皇杯全日本サッカー選手権ベスト16(Jリーグ発足以降、大学生チームとして最上位)、第65回全日本大学サッカー選手権優勝(13年

ぶり9回目)、翌2017シーズンには第91回関東大学サッカーリーグ優勝(13年ぶり15回目)など、PTの活動の成果が、トップチームの結果として表れるようになっていった。これには本活動の一つであるゲーム分析の精度が向上してきたことやコンディション管理の体制が整ってきたことなどが直接的な影響として挙げられる。しかし、そうした本来の目的による影響だけでなく、サッカーについて考える機会が増えたことによるサッカーの見かたやとらえ方の変化、チームメイトである仲間が自分たちのために時間を費やして作業してくれていることに対する感謝など、目には見えない部分での影響も少なからずあったと感じている。スポーツを「する」というかかわり方だけではなく、「支える」、「支えられている」という関係を体感することができており、学生スポーツならではの良さが本活動にはあると考えられる。

2つ目は、学術的な成果である。前記した通り、実際の取り組みそのものが論文としてまとめられたことは大きな成果であるといえる。また、本活動を日本コーチング学会において発表(小井土、2017:ポスター)したところ、指導者また現場にかかわる学生・院生から詳細な活動内容についての問い合わせが多くあり、その興味の高さを実感した。また前記した通り、卒業論文や修士論文としてまとめることを想定しながら活動を行うことで、より科学的な視点で活動にかかわることができるようになった学生も増えている。本活動に関する情報が広く伝わっていく中で、2020シーズンに蹴球部の現場にかかわる院生スタッフ(研究生なども含む)は14名となり、その内訳は学内進学者が4名、学外進学者が8名、外国籍学生が2名となっている。国内外を問わず蹴球部で、本活動を通して深く学びたいという学生が増えていることは嬉しいことである。

3つ目は、進路選択の幅が広がったことである。実際、ある学生はPT創設当初から本活動に関わり、研鑽を積む中で、現場のアナリスト

としてだけでなく、データ分析のおもしろさ、その必要性を普及するような仕事に就くことを希望し、あるデータ分析会社への就職を決めた。また、ある学生はPTの活動を通じて、将来的にJリーグチームの経営に関わりたいと考えるようになり、そのための足掛かりとして、Jリーグチームをスポンサーしているコンサルティング会社に就職し、現在少しずつサッカー部門へのかかわりを増やしているという報告も受けている。そうした事例からも、学生が漠然ともっていた進路像に対して、関係領域に関する知見に触れ、実際の現場に深くかかわる機会をもち、自分に必要なスキルが身につくことにより、実際の進路決定につながっていったといえる。また、JリーグチームにおいてITを用いたゲーム分析、パフォーマンス分析ができるアナリストの需要は年々高まっている。しかし、すでに現場にかかっているコーチからは、新たなスキルを身につける時間がないという声を多く聞く。そこで、現在のトレンドをとらえつつ、学生の間にトライ&エラーを繰り返しながら、实际的、実務的なスキルを身につけることができる本活動は、現場で即戦力として活躍できる人材を育成するという観点ではおおいに機能していると考えられる。

【今後の展望】

PTを立ち上げて5年が経ち、筆者としても想定以上に機能的な組織となっており、着実に成果を上げていると感じている。今後の課題としては、予算の充実ならびに外部団体、人材との連携の2点が挙げられる。まずは、予算についてであるが、現在は主に、部員から集めた部費および部がスポンサー契約している企業からの支援で活動をしている。しかし、それだけでは活動内容に限界があるとも感じている。例えば、Jリーグチームでスタンダードになってきている分析ツールを導入しようとする予算的にはかなり厳しく、断念せざる得ない状況にある。現場での即戦力を育成するという観点で

はぜひとも導入したいシステムでもあるだけにどのようにしていくべきかを思案しているところである。今後、さまざまな研究室と連携して研究を前提として進めていくことも、予算面の課題を克服する一つのアイデアとして考えられる。

次に外部との連携面に関してだが、PTの活動の狙いとして実社会で使えるスキルを獲得するという面がある。PTの活動をより実践的な活動にするためには、いかに現場の感覚をPTの活動に取り込んでいくのが重要な観点となる。実際、現在アスリート、チームで使用するコンディショニングアプリケーションを運営する会社にインターンをしている学生は次のように語っている「費用対効果や実際のユーザーのユーザビリティまで意識した運用プランを考える必要性については、これまであまり意識していなかった」。こういった発言に代表されるように、実際の会社に飛び込み、実地で求められることを肌感覚としてもち、それをPTの活動等に還元することで、より実践的な活動にしていくことができると考えられる。また、外部の人材との連携という観点では、現在、メンタル班に蹴球部OBでPh.D.をもつ研究者に関わっていただき、班の活動や論文作成にアドバイスをいただいている。このようにオブザーバー、アドバイザー的な役割として有識者に入ってもらうことで、より専門的な分野に関する学生らの視座の向上につながっていると感じている。適切な人材の選定も含めて前向きな検

討が必要であると考えている。

最後に、本活動が、筑波大学だから、蹴球部だから、とさまざまな条件が揃っているからこそできている活動であることは筆者も重々承知している。しかし、5年前にはこうした組織的な取り組みはなかったことも事実であり、実際に活動をしていくなかで、発展し、いままも成長していると実感している。なにごと自分たちに必要なこと、できることから取り組み始め、そこから内容を精査し、よりその組織に合ったかたちに整えていくことが肝要であると考えている。大学生になってからもスポーツと真剣に向き合っている者たちの集まりだからこそ、本活動のような取り組みを通して、よりスポーツを深く、賢く、楽しめる主体者を育成していくことを目指したい。本活動の意義と内容を理解していただき、さまざまな展開がされていくことを願い、本稿のまとめとする。

文献リスト

- 小井土正亮：大学サッカー部における競技力向上のため組織的取り組みとその効果の検討。日本コーチング学会，山梨（ポスター発表），2017。
- 内田雄基：アスリートにおける主体的なチームビルディングのための測定尺度と実施プログラムの開発 - サッカーチームにおける有効性の検討 -。筑波大学体育心理学研究室卒業論文，2018。